



👁️👁️ みどころ

2023 年 10 月 7 日に突然起きた、ハマスによるイスラエルへの大規模攻撃に世界中は震撼！イスラエルの報復が大規模なものになる中、第 5 次中東戦争や第 3 次世界大戦の危険さ！そんな中、昔からイスラエルと対立し、ハマスを支援しているイランの動きは如何に？

パナヒ監督は、イラン政府により 6 年間の懲役刑と 20 年間の映画制作と出国を禁止されながら、『人生タクシー』（15 年）、『ある女優の不在』（18 年）を監督しているが、本作のタイトルは一体ナニ？

本作は、2 組の恋人たちのイランからの脱出劇を描くものだが、彼らにとってのクマとは一体ナニ？劇中、パナヒ監督は村人から、「道にはクマが出るので一人で行くべきではない」と警告されるが、その意味をどう考える？

■□■パナヒという監督を、イランという国をどう考える？■□■

私がジャファル・パナヒ監督をはじめて知ったのは、『オフサイド・ガールズ』（06 年）（『シネマ 15』291 頁）を観た時。同作を観てはじめて、彼がカンヌ、ヴェネチア、ベルリンの三大映画祭を制覇した巨匠であること、それにもかかわらず、彼の映画はイラン国内での公開が許可されていないことを知った。さらに、同作を観てはじめてイランという国について、また“イラン革命”なるものについて考える必要性を痛感させられた。

国内での上映禁止処分は、中国の第 6 世代を代表する賈樟柯（ジャジャン・クー）監督と同じような立場だが、賈樟柯監督がその後も映画制作を続け、ヒット作を全世界に発信し続けているのと同じように、パナヒ監督も映画制作とその世界への発信を続けてきた。私は、『これは映画ではない』（11 年）と『閉ざされたカーテン』（13 年）は観ていないが、『人生タクシー』（15 年）（『シネマ 40』78 頁）と『ある女優の不在』（18 年）（『シネマ

46』115頁)を観た私の評価は星5つだったから、それに続く本作も必見！しかし、2010年12月に6年の懲役刑と20年間の映画制作と出国を禁止されたパナヒ監督は、どうやって本作を制作し、どうやって日本で公開することができたの？

■映画撮影もリモートで！これならOK！？■

コロナ禍が全世界を覆う中、直接対話を避けるべくリモート方式が広がっていった。当初は目の前にいない相手とカメラ越しで話すことに抵抗感があったが、慣れてくると、それはそれで便利なもの。コロナ禍が3年も続くと、リモート方式を前提とするさまざまなグッズはもとより、書斎まで登場してきた。ならば、出国を禁止され、映画制作を禁止されたパナヒ監督も、リモート方式を活用すれば映画制作は可能なのでは・・・？

本作冒頭、政府からの拷問や虐待から逃れるため、偽造パスポートを使ってフランスへ海外逃亡しようとしているカップル、ザラ（ミナ・カヴァニ）とバクティアル（バクティアル・パンジェイ）の姿が登場する。しかし、「カット！」の声がかかり、やり直しを命じられているところを見ると、これはどうやらパナヒ監督がリモート方式でドキュメンタリードラマ映画を撮っている風景らしい。その撮影場所はトルコだが、パナヒ自身は国外に出ることを禁じられているため、首都テヘランの自宅を離れてイランの小さな村に身を潜めるように滞在し、パソコンのライブストリーミングを使用して遠隔で助監督レザ（レザ・ヘイダリ）に指示を出しているわけだ。なるほど、映画の撮影もこれならOK！

そう思っていると、ある日、Wi-Fiが不安定で回線が切れてしまい、映画撮影は中断してしまったから、アレレ。携帯電話も圏外になってしまったため、パナヒは空いた時間で何気なく村の子どもや景色などの写真を撮影していたが・・・。

■滞在先でもトラブルに！その原因は？責任追及は？■

私はパナヒ監督がイラン政府から危険思想の持ち主として睨まれていることに同情し、イラン政府を批判する立場だが、パナヒ監督は、わざわざ首都テヘランを離れて、イランの小さな村に入り、村民に溶け込みながらリモート方式で映画撮影をしているにもかかわらず、あの日、何気なく村の子供や風景の写真を撮ったことが原因で、大変なトラブルに巻き込まれることに。それは、偶然彼が撮ったカメラの中に、若い女性ゴザル（ダリヤ・アレイ）とボーイフレンドのソルドゥーズ（アミル・ダワリ）が一緒に写っていた！ということだ。

この村では、女の子が生まれると将来の夫を決め、へその緒を切るしきたりがあり、ゴザルの結婚相手はヤグーブ（ジャワド・シヤヒ）と決まっていたそう。それにもかかわらず、ゴザルは隠れてソルドゥーズと恋愛関係になっていたらしい。パナヒの元にやってきたゴザルは、「その写真を村の誰かが見たら大変なことになる」と必死で訴えていたが、本人らの親を含めて大騒ぎする村人たちから、「証拠写真を出せ！」と迫られると、さあパナヒはどうするの？

■□■宣誓室では？「神に誓う」とは？この村は本当に難しい■□■

弁護士兼映画評論家の私は、当然「法廷モノ」が大好き。本格的な「法廷モノ」を観ると、評論として書くべきことが次々と湧いてくる。本作は「法廷モノ」ではないが、中盤では、パナヒがゴザルとソルドゥーズの有罪証拠となるツーショットの写真を撮影したか否かを巡って、宣誓室のシーンになるので、それに注目！西欧型民主主義社会の「法治主義」に基づく裁判では、国によって多少の違いはあっても、根本的なルールはほぼ同じだ。しかし、イスラム教国家であるイランのこの村では、すべての村民が参加する、宣誓室における「質問と回答」によって“真実”が決まるらしい。

もっとも、その宣誓室にパナヒを案内した村人は、「道にはクマが出るので一人で行くべきではない」と警告したうえ、パナヒをお茶に招待し、「真実を誓う必要はない、皆に平和をもたらすなら嘘も許される」と告げたから、ビックリ！そんな訳のわからないルールでホントに真実を発見することができるの？また、そもそも「道にはクマが出る」とは一体ナニを意味しているの？私は 2023 年も 5 月と 7 月に北海道の苦小牧でゴルフをしたが、昨今の北海道では餌にありつけなくなった山の中の熊が人里に出没していることが報告されている。まさか、イランでそんなことはないと思うのだが、この村人はなぜそんなことをパナヒに告げたの？

■□■彼らは何から逃げるの？パナヒはクマから逃げないの？■□■

国外へ脱出するためにはパスポートが必要。そのため、偽造のパスポートが出回り、それが高値で売れることは多くの映画に登場するし、名作『カサブランカ』(42 年)にも登場していた。フランス本国がナチスドイツに占領され、ヴィシー傀儡政権下になってしまう情勢下、“自由の国アメリカ”へ国外脱出するために、多くのフランス人がアメリカへの唯一の経由地である「カサブランカ」に集まったそう。しかして、本作冒頭、ザラとバクティアールのカップルが偽造パスポートを使って、イランからフランスへの国外逃亡をしようとしている映画の 1 シーンが撮影されていたが、本作ラストに向けては、その 2 人が行方不明になってしまうので、その展開に注目！

他方、自分が偶然撮影したカメラの中に、ゴザルとソルドゥーズのカップルが写っていたか否かを巡って、村を挙げての大騒動に巻き込まれてしまったパナヒ監督だったが、生まれた時からゴザルの将来の夫と決められていたはずのヤグーブはゴザルの現在の恋人、ソルドゥーズに対して強烈な敵意を燃やし、暴力沙汰に及んだから、さあ大変だ。ゴザルは 1 週間以内にソルドゥーズと 2 人で駆け落ちするとパナヒに打ち明けていたが、ホントにそんな脱走劇ができるの？そして、パナヒは、それに手を貸すの？

ザラとバクティアールが国外逃亡を目指すのは、イラン政府からの拷問や虐待から逃れるためだが、ゴザルが将来の夫と決められているヤグーブの目を眩まして、恋人のソルドゥーズと共に国外脱出を目指すのは、何のため？何から逃げるためなの？

他方、20 年間の映画制作と出国を禁止されたパナヒ監督は、前者には違反しているもの

の、後者には忠実に従っている。それは一体なぜ？そして、あの時、村人がパナヒに告げた、「道にはクマが出るので1人で行くべきではない」との忠告の意味は一体ナニ？

■□■イランはハマスを支援？現情勢下パナヒ監督の思いは？■□■

中東情勢は複雑怪奇で難しい。それは、『アラビアのロレンス』(62年)を観た後の一貫した私の持論だが、2023年の夏以降、アメリカの仲介によって、イスラエルとサウジアラビアとの国交正常化協議が進んでいたのは、パレスチナ問題の解決を目指すうえで、吉報！だって、これは将来的なイスラエルとパレスチナの「二国家共存」の実現性も視野に入れた取り組みなのだから。私はそう思っていた。しかし、アラブ諸国の雄であり、イスラム教スンニ派の盟主であるサウジアラビアが“憎っくき米国”と固い同盟関係で結びついているイスラエルに近づくことに不安と不満を示していたのが、イスラム教シーア派の大国であるイランだ。そしてまた、イランの支援を受けて、長年パレスチナ自治区“ガザ”を実効支配し、イスラエルとの武力抗争を続けてきた“イスラム主義武装組織”ハマスだ。

中東情勢を巡っては、2023年10月7日に突然、ハマスがイスラエル国内に大規模なロケット弾攻撃と地上攻撃をかけたことによって、すわ、第5次中東戦争か！第3次世界大戦か！という緊迫した情勢になっている。ハマスの“5000発を超える”と言われるロケット弾攻撃によって強固さを誇っていた「ミサイル防衛システム」が破られ、“ガザ”の壁を破壊してイスラエル国内に侵入してきたハマスの武装兵士たちによって多くの民間人を“人質”に取られたイスラエルのネタニヤフ首相は激怒！2022年12月に誕生した、「史上最も右寄り」と言われているネタニヤフ政権は直ちに「戦争状態！」と宣言し、ガザへの徹底的な空爆を開始。近々、大規模な地上戦が開始するのも必死の情勢だ。軍事や資金面でハマスを支え続けてきた大国イランは、最高指導者アリ・ハメネイ師が「パレスチナ解放まで戦士を支える」とハマスへの全面支援を強調しており、エルサレムに打ち込まれたロケット弾もイランが提供したものではないかとの見方もある。つまり、今回のハマスによるイスラエルへの大規模攻撃の背後にはイランの影がちらついているわけだ。

他方、イランは女性差別の厳しい国としても有名だ。そのため、イランでは髪の毛を覆う布「ヒジャブ」の着用が義務付けられているが、そのかぶり方をめぐって2022年9月にはマフサ・アミニさんが逮捕され、死亡するという事件が発生した。2023年のノーベル平和賞がイラン人ジャーナリストで人権活動家のナルゲス・モハンマディ氏に授与されたのは吉報だが、一体イランという国はどこへ行こうとしているの？今や、イランは北朝鮮と並ぶ、世界1、2を争う無法国家になってしまったの？

本作中盤、パナヒ監督はイランからの国外脱出成功の寸前まで進んだが、なぜかそれを自ら断念するシークエンスが登場する。世界一平和で自由な国、ニッポンで暮らす私が、イランに住み続けているパナヒ監督の心境を推し測ることは到底できないが、本作の公開にやっとこぎつけたパナヒ監督は、10月7日から始まったハマス VS イスラエル抗争をどのように見ているのだろうか？

2023(令和5)年10月12日記